
セカイノハテ

希沙良 栖依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイノハテ

【Nコード】

N3418M

【作者名】

希沙良 栖依

【あらすじ】

異世界に飛ばされた聖夏（主人公）が、いきなり処刑されて、その国の皇子の体で目覚めて自分を殺した国に復讐しようとする、が・・・「なんだこの国の借金は！！」

基本お人よしの主人公が目的のために頑張る話です。
もともとの掲載サイトMOLTOの方もよろしく願います。

少し話をまとめました。内容はなにも変わっていません。

序章

聖夏は死んだ。

いきなり、殺されたのだ。

彼がそれを理解したのは、自分の首が処刑場にさらしものとして置かれた時だった。

血の気のない、いつも鏡で見慣れていた顔を見たとき、聖夏は初め、意味がわからなかった。

なぜ、自分は自分の、胴体のない首を見ているのだろうか？

聖夏は自分のみたものが信じなれなかった。

もし、本当に自分が死んだのなら、今の自分は何なのだろう。

（もしかして……、いや、もしかしなくても、今の俺は幽霊なのか！？）

序章（後書き）

す、すいません・・・!!
短いですorz

応援よろしくお願いします。

1・まさかの出会い

（ふむ、まさに、その幽霊なわけだが……。まさか、落ちて早々に殺されるとは……）

誰に聞こえるはずもない俺の叫びに、まさかの返事が聞こえた。

（ちよっつ、お前誰！？）

気がついたら俺の横に長身の男がいた。

（あゝ？私か？ お前をこの世界に送った

神様

だけど何か？）

神様（？）は腰まであるさらさらの髪を払ってポーズを決めた。
その瞬間、俺はこいつは関わってはいけない、いや、関わりたくない人種（？）だと思った。

（なあ、うざいから殴っていいか？）

（やめてくれ。殴られると一応痛いんでな。
さっきのはなに、ジョークというやつだ。
人間、無駄にテンションの高い奴がそばにいたら、たいがい冷静になるものだろう？ どうだ？ 落ち着いたか？）

確かに神様（？）に言われたように俺は冷静になっていた。まあ、腹はものすごく立つが。

（あ、確かに。じゃあ、冷静になったことだし教えてくれ。何が、
どうして、こうなったか、だ。
というか、お前本当に神様なのか？）

（先に言っておこう。私は確かに神様だ。と言っても私は、この世界、神だな）

（どういう、意味だ？）

（君もつずつ気づいているだろうが、ここは君のいた世界とは違う。
う。

よく言う異世界というやつだな。

そして、一つの世界につき神が一柱いる。

もちろん、君のいた世界にも神がいた。そしてさっき、言ったように私はこの世界の神だ）

うわ、どうどうと宣言しやがった。うぎっ。

なんか、いちいち突っ込んでたら話が進みそうにないから先に進めるが。

（ふむ……わかった。じゃあ、なんでおれがこの世界に来たかわかるよな、この世界の神様なら）

（当然。……君がこの世界にきた理由はねえ、私が呼んだんだよ。
君のいた世界の神に許可をもらってね）

……………死んでしまえ、こんちくしょう。
思わず手が出してしまった。

（お前のせいかな）

地を這うような声を出しながら俺は神の胸ぐらを掴んだ。

（お前のせいで、来たくもない異世界に連れて来られて拳句、殺されたのか、俺は）

神はただの人間の幽霊を怒らせただけとは思えない慌てぶりで早口にまくしたてた。
てか、こいつ本当に神か？

（初めに言っただろ。私も予想外だった、と。元々、きみには今死にそうになっている皇子の代わりをしてもらおうと思っていたのだ。君は死なないはずだった）

俺は自分が死なないはずだった、と聞いて神の胸ぐらを掴んだ手をぴくり、と反応させた。

死なないはずだった？

（けど、実際問題俺は死んでるんだが？ だいたい、なんだ？ その、皇子の代わりが俺というのは）

俺は死んでから時間が結構たってきたせいか、かなり冷静に神の細かい言葉まで拾えていた。

（あゝ。まずそれを説明するには、この事を理解してもらわねばならないんだか……。……君、パラレルワールド、分かるか）

俺はいきなりの神の質問に眉をしかめながら、漫画や小説などで得た知識を話した。

（確か、自分のいる世界の隣に別の世界があって、そこにも自分がいて、この自分と微妙に違う生活を送ってる、ってやつだったか）

（そうそう、それ。それなんだが………というか、君はいつまで、仮にも神様の胸ぐらを掴んでるのかな？）

そういわれ、俺はしぶしぶ、本当にしぶしぶ手を離れた。

神は崩れた襟元を直しながら

（まあ、これは特殊なんだけど、君にはパラレルワールドみたいに、この世界に別の君がいるのだよ。そして、その君がこの国の皇子というわけだ。そして、今この国の皇子がいなくなるのは非常にまずい。この国はこの世界の中心と言って過言ではないほど大きな国だ。そんな国で今、皇帝の後継者が死んで後継者争いが起こると他の国にまで飛び火して大きな戦争が起こる。それを回避したいのだよ）

（そんなことのために神が出張ってるのか？）

俺は不審に思った。

世界中を巻き込む戦いなら、地球でも最低2回起こっている。

もし、神がそれを嫌がるなら、この地球での戦いもなかったはず。ということとは、この世界での大規模な戦争も地球のある世界の神と同じような神にとって止めなければならないというわけではないはず。

俺はその不審を言葉にした。

（だが、地球の世界大戦はきっちり起こってるぞ）

（ああ。それは、この世界がまだ出来て間もないからからそんな状

態で戦争が起きるとさすがに世界全体のバランスが色々と崩れてま
ずいから私が介入しているのだ。……君をこの世界に連れて行く
という方法でね)

俺はこめかみが引きつるのを感じた。

(ほーお、じゃあなんだ、俺は見知らぬ世界に完っ全にそっちの都
合で連れて来られたのか)

俺はものすごくいい笑顔だったと思う。ニツコリ、と効果音がつ
きそうなほどに。

……だけど、きっと神には俺の背後から黒いオーラが見えている
ことだろう。

仮にも神様だろうに、神は冷や汗を出していた。

(……ま、まあ、そういう事になるな。だ、だが、完全にこっちの
都合というわけではないのだ。

……実はだね、本来、君の魂は此方で産まれるはずだった。
しかし、……まあ、神にも色々あるんだよ、うん。と、いう
わけで手違いで君の魂が地球のある、まあ、私達神はクシラとその
世界を呼んでいるのだが、そのクシラの方で産まれるはずだった魂
と入れ替わってしまった)

(は？ って、事は本来、俺がこの世界で皇子やってたのか？ ……
…そして本来クシラに産まれるべきはずの魂が、こっちで皇子やつ
てたってことか)

(そういう事。まあ、当然、本来あるべき姿とは違うから多少のゆ
がみが生じてしまった。

オウラが、ああ、こちらの君の名前なんだが、まあ、そのオウラが

病弱になったのはそういう理由なんだが………っと、いい加減説明を止めないとオウラの魂が限界のようだ。
彼の魂が体からなくなった直後じゃないと君は本来の体に入れないから、話はこれくらいにしよう)

(なっ！)

まだ説明は十分じゃない！と俺が叫ぶ前に、神は俺の前に手を翳した。

俺が、薄れゆく意識のなかで最後に聞いたのは、

(私の名前は『琳希』。何かあれば呼ぶといい)
という、神の言葉だった。

* * * * *

「オウラ様が目覚めました！！」

俺が次に目覚めた時、聞こえた最初の言葉は、俺が今までの人生を捨て新たな人生を歩むことを、如実に感じさせる言葉だった。

2・ま・じ・で・す・か（前書き）

サブタイトルが思いつきませんでした……。

適当です、はい。サブタイトル変えると思います……。

いつも短いので長めにしてみました。

ご意見をくださるとうれしいです。

PVが1000突破……ありがとうございます……！

2．ま・じ・で・す・か

俺が、いや、周りから見たらオウラが目覚めてからの3日、俺の周りは半端なくせわしなかった。

まあ、そのおかげで、俺がオウラじゃないとばれることがなかったのを助かったのだが。

そして、オウラの目覚めを周りに告げたあの少年は、オウラの従者でカンナという名だった。何故、彼のことが分かったかというところ、目覚めて2日も経たないうちにこの世界の神、琳希が現れ、

「君は、今度からオウラになるというのに、オウラの記憶が無いと不便だろう。記憶をオウラの魂から抜き取っておいたからこれを君にやろう」

と言い、喋ることすら出来ないほど衰弱している俺の頭をガシツ、と掴んで、まあ、普通の人間ならたえきれず死ぬ情報量だが、ただの人間じゃない君なら大丈夫だろう、きっと。という無責任極まりない言葉を吐き、俺が、そんなアバウトな！と感じた瞬間にもものすごい情報量が脳に流し込まれ、結局気絶する羽目になりながらもオウラの記憶を受け継いだためだ。

そして、衰弱している身体で動くことの出来ない間、俺はオウラの記憶を探った。

記憶の中のオウラは、こんな奴俺じゃない！と叫びたくなるほど気弱な少年だった。身体が弱いせいもあったのだろうが、部屋に1日籠もっていつも本を読んでいた。

俺はオウラがあまりくわしくこの世界について知らないことに驚いた。琳希はオウラがこの国を継ぐと言っていたのでそれなりの教育を受けていると思っていたためだ。

しかし、それも彼の記憶を探っていくと理由が分かった。

この世界には魔術が存在しているらしい。そして、それを使用するとき、その使用者は背に翼が生える。魔力の強い者ほど大きく白い翼が、そして魔力が弱い者ほど黒くくすんだ小さな翼になる。この世界の者はどれだけ魔力が弱かろうと絶対に翼が生える。なぜなら、彼らの祖先は神に飼われていた鳥だと言われているからだ。だから、その祖先の名残として魔術を使用するさい、翼が現れる。・・・ちなみにこの翼、魔術を使用しないときでもだせて、翼の大きい者は飛べるたりもするらしい。

そして、オウラのいるこの国『コランシス帝国』は帝位継承の際、最も重要視されるのはこの翼だった。より白く、より大きい翼を持つ者に帝位継承権が与えられる。

しかし、オウラは魔術がつかえず翼を出せたことがなかった。

そのため、彼は魔力なしとして、帝位継承権がなかったのである。そして、彼は身体が弱く長時間の講義に耐えることが難しかったのも一因としてあった。

俺は彼の記憶を見て、帝位継承権がないなら、こいつが死んでも問題なかったんじゃないかと感じた。実際、オウラの記憶の中で彼には弟が2人いることが分かっていた。

結局、俺は声を出せるまでに回復したとき、琳希の名を呼んだ。ホントに名前呼んだだけで来たらすごいよなあ、と思いながら。

「琳希」

「どうかしたのかな」

「え、ホントに来た。暇なのか？」

思わず心の声が出てしまった。俺の枕元にいつの間にか琳希が現れていて、起き上がれない俺を上から見ていた。……何か腹立つ。

「君は神に敬意の欠片もないな。……暇ではないよ。これでも一応、神なのでね、忙しい身の上なのだよ」

「じゃあ、なんで現れた。……てか、腹立つからすわれ」

君って奴は……、とかいいながらため息吐いて、神は目線がベツトに寝てる俺と同じになりように、床に座った。こいつ、結構律儀だな。

「君が入れ替わって産まれてしまったのは、私達神の不手際で、君はあちらの世界でうまくやっていたのに、こちらの世界に連れてきてしまったのは完全にこちらの都合だからね。これくらいのサービスはするよ。」

「ふーん。じゃあ、琳希って大分サービス精神旺盛だな。この世界の言葉も分かるようにしてくれてるし」

読み書きはまだしたことがないから分からないが、この1週間で喋る分にはこの世界で不自由がないことに気付いた。枕元で医者がしゃべっていることが分かったからだ。

はじめは、日本語をしゃべっているのかとおもったが、そう思いながら聞くと全く違う言語が聞こえたから確実だ。

そしてその言語が俺にも使えるのかは確認済みだ。相手の言ってる事は分かるのに、自分はそれに返事が出来ないとかいう事態になったらシャレにならない。

だから、確認のためカンナに、水がほしい、って言ったら通じたんで一安心。読み書きもいつか、試さないと。

「あー……、言いくいんだが、その言語理解は君が自分でやっているのだよ」

「は？ どういう意味？」

「君はオウラの記憶で分かっていると思うが、オウラは魔力なしだと言われている」

「実際、そうだろ。魔力があれば生えてる翼がないらしいじゃないか。というか、この話と言語理解はなんの関係もないだろ」

「まあ、黙って聞きたまえ。多少、話は長くなるが……」

琳希の話では、実際にオウラに魔力はなかったらしい。

魔力は魂に付随するもので、あちらの世界、クシラじゃ魔力なんてものは、あってもどうせ使えないのでクシラに生まれるはずのオウラの魂に魔力がないのは当たり前、ということだそうだ。

ちなみに、こちらの世界でオウラの体が弱かったのは『魔力なし』のオウラの魂が周りの魔力にあてられたせいらしい。いわゆる、『魔力酔い』だと琳希は言っていた。

そんで、こつちの世界で生まれるはずで、しかも次期皇帝になるようになつていた俺の魂は半端ない魔力を持っているらしい。

どれくらい強い魔力か琳希に訊いたら「この世界で君に勝てる魔力量の人はいないよ」と、笑顔で言われた。（実際、俺が魔力全部

を使って破壊の魔法を使ったら、この国のある地球とほぼ同じ大きさの星を一瞬で焦土に変えられるそうだ。」

ここからが俺がなんでこっちの言葉が理解できるのか、ってことに繋がるんだが、正直、その所の説明はかなりややこしくて半分も理解できなかった。

まあ要するに、その強すぎる魔力がほんの微量だけど、俺の身体の外に漏れ出ているらしい。

その魔力が、俺が無意識のうちに思った「この世界で言葉が通じないのは困る」と言う願望を読み取って勝手に魔法を行使しているんだと。

「魔法を使っているときは普通、翼がでるんじゃないのか」って訊いたら、「持続する魔法は始めの魔法をかける時だけでるのだよ。まあ、君の場合、魔力が強すぎて軽く規格外だから、簡単な魔法は翼なしでもできるんだけどね」だそうだ。

2・ま・じ・で・す・か（後書き）

夏休み中は週2回ペース目指します!!

3・家族と親友（前書き）

ユニークアクセス数500突破！！
ありがとうございます！！！！！！

3・家族と親友

説明を聞き終えて、俺は頭の中を整理しながら訊いた。

「クシラにいる俺の家族やタクは、俺が急にいなくなってどうしてるかわかるか？」

これは、冷静に物事を考えてから一番気になったことだった。

ここに出てきたタクって名前は俺の唯一の友人であり親友の河内こうち拓夢たくむである。

俺は、クシラで、……まあ、悲しい話だが、友人というものは一人しかいなかった。

原因は完全に俺で、小学校のころから、いつも前髪でほとんど顔を隠して学校の教室でも一人でひたすら読書にふけて友人を作る気はまったくなかったからだ。

はたから見たら、ものすごく暗い奴に見えたことだろう。そんな俺に声をかけてきた唯一の奴である。

小学5年の春に、クラス替えで同じクラスになり、何を思ったか、俺に話かけてきて腐れ縁とでもいうのか、中学高校も同じになり、俺の唯一の友人となった人物である。

そいつと、家族が俺が急にいなくなっとうしててるのか、気になっっていたのである。

物思いにふけていた俺は琳希の声に現実に戻された。

「河内拓夢は君のことをすごく心配していたようだ。

君の家族は君がいた時と何も変わっていないようだが、君の家族は薄情者なのか？」

「琳希はしらないのか？」

「この情報はクシラの神経由だからね。君の家族のことまで私はわからないよ」

神様にも知らないことはあるらしい。

「別に家族仲が悪いわけじゃないぞ。俺の家の家族は変わり者ばかりなんだよ。

だって、前に姉貴が10日家に帰ってこなくても何も言わねーんだぞ」

たしか、俺が中学に入ってすぐのことだった。

5歳上の姉貴がいきなり行方をくらました。父さんや母さんが「そのうち帰ってくる」って言うもんだから俺はそうなのか、と思いながら日々を過ごしていたら10日後に帰ってきて、第一声が、

「山籠りしてた!!」
だった。

そのあともたびたび、姉貴は行方をくらまし、暇なときは俺もついて行ったりしてたもんだから、親は多分気にして無いだろうことも想像がつく。姉貴にいたっては「とうとうセイも一人で行くようになったかあ」とでもいつてそうだ。

タクには行方をくらます前はちゃんといつも連絡入れてるから今回は心配しているだろうなあ。

そのことを話すと琳希はポカン、とした顔をした。おお、神様のこんな顔見た奴とか俺が初めてじゃね？

「君の家族は自由すぎないか……」

「そうかあ？」

俺が疑問符を浮かべるとため息をつかれた。失礼なやつだな。

そんなことより、俺は琳希に頼みたいことがあった。

「なあ、俺はクシラにいけないのか？　せめて、タクには事情を説明したいんだが。ってか、もう俺、二度と家族やタクに会えないのか？」

「すまないが、君はもうクシラには戻れない。……だが、手紙ぐらいなら私経由で渡すことができるが、書くか？」

家族やタクに会えないのはつらいが、手紙を渡せるのはねがつてもないことだった。

「もちろん、書かせてもらう。つってもこの身体の状態じゃ当分無理だけどな」

現在の俺は身体を動かすことすらままならない健康状態だ。手紙を書くのは当分先のなりそうだった。

「そうか。それなら君が起き上がれるようになったらまた来よう」
「おう。よろしく頼む」

そう言った時には神の姿はどこにもなく、換えの服を持ったカナが俺の部屋に入ってくるところだった。

3・家族と親友（後書き）

あれ？もしかして短い？

すいません！！けど、ここが一番キリがいいんです。

ちなみに、聖夏は4人家族で両親と姉1人です。

姉だけ名前が決まってて『秋葉^{あきは}』です。

この家族と親友の番外編を余裕があれば書くつもりです。

4・見た目って大事だよね。

俺は起き上がれるようになってすぐに家族とタク宛てに手紙を書いて琳希に渡した。

その後は特に変わったこともなく過ぎ、とうとう俺は立って歩けるまでに回復した。

歩けるようになってまずびっくりしたのは、俺の姿だった。

部屋の鏡はベッドから離れた所にあつたからこつちの世界にきてから今まで自分の姿をみたことがなかった。唯一わかっていたのは、髪の色が俺は黒だったのに対してオウラの髪はルビーみたい紅い色ということだけだった。

鏡に映った俺の姿はずっとベッドでふせていたせいで、痩せてはいるが確かにもとの俺とまったく同じ顔をしていた。

そして、一番驚いたのは、眼の色だった。眼の色が角度によって緑に見える蒼だった。実はこの色、俺の元の身体と同じ色なのだ。

クシラで俺がずっと顔を前髪で隠していた理由がこれだったりする。

思わず鏡に映る自分の平凡な顔を凝視してしまった。

（またなのか！！）

思わず心の中で絶叫してしまった。

家族は全員黒目黒髪のなかで俺だけ生まれた時から眼の色がおかしかった。

父さんと母さんは近所でも有名になるくらいのおしどり夫婦なので、誰も母さんの浮気は疑わなかったらしい。それに、親戚から強く勧められて結局遺伝子検査をやったら、やっぱり父さんと母さんの子供だったんで二人は特に気にせずに突然変異の類だろうと思っただんだと。

けど、この眼のせいで小学校のころ、変なコレクターのおっさん

にさらわれかけてから俺はずっと前髪で顔を隠していた。

にしても、久しぶりに自分の顔をすっかりみたなあ。

髪の色が、紅い以外ホント、なんのちがいもねーなあ。

俺が鏡を凝視してたのを、何を勘違いしたのかカンナが、

「だ、大丈夫です！！ 痩せてもあなたはともおきれいです！！」
とか言いやがった。

思わず全力で言い返してしまいましたよ、ええ。

「は？ おきれいです！？ 誰が！？ 俺のこと言ってるなら、いっぺんお前眼球洗ってこい。」

お・れ・は・平平凡凡な顔なんだ！ 君の眼には何？ 不細工でもきれいに見えちゃう不思議フィルターでもかかっているわけですか？」

オウラの仮面かぶる前から捨てちいましたよ、ええ。

てか、演劇部でもない俺にとっさの反応でオウラの振りができるわけがないだろうが。

あああああ！ 琳希にものすごく文句言いてええええええ！
無理です、俺オウラの振りとかできません。どうするよ？ カンナ、ポカーンって口あけたまんまかたまってるんですけど！！
「え、え？ オ、オウラ様ですよね？」

うーん、どうしたもののか。

実は二重人格なんだ！ とでも言ってみるか？ ……無理だな。
だって『二重人格』弱気オウラの振りもする』だぞ！？ めんどくさいしややこしい！！

とぼけてみるか？ ……けど、やってしまってから結構時間経ってるし今更それもなあ。

しょうがない。……………無理を押し通すことにしました

「ああ。俺がオウラだ」

「へっ？ お、俺？ …… オウラ様どうされたんですか！！」

「どうもしねーよ。ももとの性格が表に出ただけの話だ」

「ももとの性格って……………」

「まあ、簡単に言つとだな、ねこ被つてたつてこと。これが本来の性格だ。

だって、身体弱いのに性格これとかダメだろ？ だから、軟弱なふりしてたわけ。

まあ、今思いつきり化けの皮はがれちゃったけどね」

自分で言つといてアレだが、無茶苦茶のこと言ってるな、おい。
これ信じたらすごいよなあ。

「そうなんですか……………。驚きましたけど、その性格のオウラ様も素敵ですー！」

わあ、どうしよう。信じちゃいましたよ。この子。

なぜあの無茶苦茶を信じる！？ これが、異世界クオリティなのか！？

ま、まあ、信じたならいいか。

「素敵って……。まあ、いいか。後、この性格の事は他の人達には言つなよ？」

「はい！！ わかりました！ 二人の秘密ってわけですね！！」

二人の秘密って……。はあ。

なんとゆうか…………… 純粋なやつだなあ。まあ、黙ってくれるならいいか。

「そうだ。ぜつたいにしゃべるなよ」

「はい！ 大丈夫です！ 僕、今日でオウラ様の従者から外れるので心配いりません！！」

「は？ 外れるの？」

「はい。実は、僕の実家の方で父がそろそろいい歳なので帰って領地を継げ、と前々から言われてまして、オウラ様の体調が戻り次第帰ることになっていたので。」

最後にオウラ様の秘密を教えてくださいありがとうございました」

超いい笑顔で言いやがった。

えー。異世界来て初めに会った人ってたいがい主要人物じゃないの？

驚いたけど、好都合かもしれない。オウラをよく知ってるカンナは正直、脅威以外の何物でもなかったからな。

ん？ じゃあ、

「お前の後任は誰が決まってるのか？」

「いいえ。まだです。決まるまでは他の使用人の方々が交代でオウラ様の世話をしてくださる予定です」

ふーん。まあ、どうでもいいか。後任が誰になろうと俺の知ったことじゃないしな。

「そうか。今まで、ありがとうな」

「い、いえ、こちらこそありがとうございました。」

オウラ様に仕えるなんて、とても名誉なことです！ とても、とてもうれしかったです」

「そっか。元気にしてるよ」

「はい！！」

4・見た目って大事だよね。（後書き）

もし、カンナ好きな人がいたらすいませんでした。
カンナ退場です。

今後出てくるかなあ。その予定は今のところありません……。

5・魔法の知識と従者探し

俺が起きることに支障がなくなつて一カ月、未だに次の従者がきまつていません。もう完治しましたよ、ええ。

部屋で前に琳希が来たときに唯一教えてもらつた魔法の『身体強化』使つたら1日で治りました。

体力もだいぶ戻つてきて動くのにまったく支障なしだったりする。

ちなみに、この世界の魔法は『思念系』、『身体系』、『干涉系』、『呪術系』の四種類に分類される。

『思念系』は相手や自分の精神に働きかけて、相手の思考を読み取つたり、記憶を改ざんしたりする魔法のことをいう。この系統の魔法はよっぽど魔力が高くないと使用できないらしく、この世界で使用できる人物はほとんどいないらしい。

『身体系』は俺が使つた『身体強化』のように自分の身体を強化したり治癒力を高めたりする魔法のこと。ゲームとかによくある『ヒール』も実際にこの世界にはあるらしく、ここに分類される。

『干涉系』は本来、『干涉』の言葉の前に『自然』がついて正式名は『自然干涉系』。よくゲームにある自然の力を借りた『ファイヤ』や『ウインド』などの攻撃魔法のようなものだ。要するに、自然に魔力で干涉して、攻撃したりするもの。あと、『テレポート』とかの空間転移もこの中に入るらしい。

それで、最後の『呪術系』は、まあ、まんま『呪い』だな。ただ、人を呪わば穴二つつてことで、それなりのリスクもあるらしい。それに、これは使用したら犯罪で、問答無用で、死刑。さすがにこれはちょっと驚いた。

あと、本当にちよつとした魔法ではない限り、魔法を使用するには媒体を必要とするらしい。（ちなみに、俺が規格外なもので、軽

い魔法に分類される俺の言語理解の魔法は、媒体無しでいけるらしい。とことん規格外だな、俺。」

媒体の形はいろいろあり、典型的な杖があれば、剣がその役目を兼用するものもあり、はてには一見アクセサリーにしか見えない指輪やピアス、ネックレスなんてものもある。

媒体はそれ専用の職人がいて、職人の腕がいいほど良質の媒体になって、魔法を使う際に必要とする魔力が軽減されたりと、特典があるらしい。ちなみに、俺の媒体は『身体強化』を教えてもらったときに琳希にもらった、俺の眼の色とよく似た石の付いた細い金鎖の腕輪だ。「こんな細い鎖で切れないのか？」って訊いたら「神の特別製だ。絶対に切れないよ。」だそうだ。

魔力なしのオウラは媒体持つてなかったから喜んでもらいましたよ、ええ。

なんでこんなにすらすらと、説明できるのかというと、君も魔力あるんだからちゃんと魔法について、本を読むなりして勉強しておくように、って琳希に言われたし一応、動けない間に本を持つてきてもらって勉強した結果ですよ、ふふん。

……って、そんなことより従者だよ。

おいおい、いいのかよ。いくら『魔力なし』だからって完全放置はどうよ。

まあ、そんなわけで自分から従者探しすることにした。

だって、従者だったら一人付けばいいだけなのに、そこらへんにいた兵士だか、近衛だかわからんやつらは、部屋の外に出るために最低でも3人は付いてくるんだぞ？

いい加減うつとおしい！！

と、言うわけで、従者探しin城内。

ちなみに、兵士だか近衛だか分からんやつ（もう兵士でいいや）は、まいてきた。今頃必死で俺を探しているだろう。

今日の兵士の人数は5人でした・・・正直、かなりうつとおしいし、俺がまあまあ高い身分つてのがまるわかりになるのがイヤだったんでまいてきました。

さーで、どんな奴がいるかなつと。

5・魔法の知識と従者探し（後書き）

諸事情により、更新停滞の可能性があります。
気長に待っていただけると嬉しいです。

6 ・なぜお前がここに！？（前書き）

な、なんとか更新できた……。
次の更新は九月になります。

6・なぜお前がここに!?

……………広すぎね?この城。

もう軽く迷子ですよ、こんちくしょう。

今はどうもこの城に4つある中庭の一つにいるようだ。この城の中庭は王族用と城で働く文官の休憩用と軍人の訓練場用と使用人用の用途に別れている。

さつきから結構使用人がここを通るのを見てるから、多分、使用人用の中庭に来ちゃったような。

ま、いいか。確か、従者は使用人の中のまああ魔力の高い奴から選ばないといけないから目的を果たすには丁度の場合だし。

うーん。ピンとくる奴が一人もいねえ。

どうしたもんか……。中庭にある木製の椅子に腰かけてひたすら、来る奴来る奴を見てみたが……。

似たような奴ばかりなんだが。

たまに、こんなとこに座ってるいい服着た奴が珍しいのか、こちら見てくる奴がいるが正直そいつらも微妙だしなあ。(魔力が高いせいか、なぜか相手の魔力量がかなりアバウトだが、だいたいわかる。超便利。)

「こんなとき、タクがいればいいんだけどなあ。」

文武両道で気の合う親友タクを思わず思い出してしまう。

あいつだったら、話し相手にもなるし、かなり楽しいと思う。

「どうした?聖夏。」

「いや、こういうときタクがいてくれたらなあって……………ええええええええ!?!」

思わず大声を出してしまった。

「タ、タク!?　なんでここに!?!」

この世界にいないはずの親友、河内拓夢が目の前にいつ通りの笑顔を浮かべていた。

なぜに！？ 予想外すぎる！

「お前、それにしても髪が紅いなあ。染めたのか？しかも、髪の毛ちゃんとしてるから、一瞬、聖夏かわからなかったぞ。お前、その髪、秋葉さんにやられて以来じゃないのか？」

秋葉つてのは、よくいなくなる俺の姉貴のこと。昔、前髪をピンで無理やり留められて、整えられたことがある。タクの言っているのはそのことだろう。確かに、今の俺は長い前髪をピンで留められて、背中の中ほどまである前髪以外の髪は一部、右の横で青いリボンでくくられている。ちなみに全部、この城のメイドさんによる。この世界じゃ俺のこの独特の眼の色は王族の印だそうで、特に眼を隠す必要も感じなくなったので、全部まかせた。前の状態は前髪が眼に入ることが多々あつて、正直、結構痛かった。

……つて、いきなり話題逸らされた……。

「いやいや、質問に答えろよ！！それに、お前の格好もどうしたんだよ」

タクはなぜか使用人の着るお仕着せを着ていた。

タクはかなりかつこいい部類に入る。確か、学校で1、2を競うイケメン（死語）だ。

彼は茶髪を肩のあたりまで伸ばして茶色の眼をしている。確か、代々色素の薄い家系だとかなんとか。

そんな奴が、使用人のお仕着せを着ると、ただのお仕着せさえ格好よく見えてくる。

んで、なんでそんなタクがここにいるんだ？

「おお？ お前、なんで俺がここににいるんだ？つて思ってるだろ」

おお、さすが親友。思っていることが以心伝心。

「じつはなあ、琳希さんが連れてきてくれたんだ」

「は？」

「お前、手紙くれただろ？」

ああ、やった。たしかに手紙は琳希に渡してやったが、
「それがどうしてこうなる!？」

6・なぜお前がここに！？（後書き）

ちよつとキリが悪いです。

こんなのをお気に入りに登録してくださってる方々、ありがとうございます！！

が、頑張りますので見捨てないで更新を気長にお待ちいただきました……

7・感動（前書き）

お久しぶりの更新です。

テスト、オワタ＼（。口＼）（ノ口）ノ
夏休みもオワタ（・・・；）

7・感動

俺の叫びを気にせず、笑顔でタクは説明しやがった。

「いや、さあ、手紙が異世界渡れるなら人もいけるんじゃない？　って手紙届けに来た琳希さんに訊いたら、行けない事もないって言われたんでそれじゃあ、連れて行って言って連れてきてもらった」

おいおい、勝手に人の親友になんてことをしてくれてるんですかねえ、琳希さんよお。というか、タクがこっちに來れるのなら、俺はなんでクシラに行けないのかなあ？

思わず呼びつけちまうじゃないですか。

「琳希、いるのか」

俺の前に琳希が音もなく現れた。

「やっと出会ったか、君たち」

「お、久しぶりです。琳希さん」

タクが現れた琳希にお氣樂にも手を振っている。何で吾氣に挨拶できるかな。あー、殴りたい。

「久しぶりだね、拓夢。どうやら無事出会えたようだなによりだ」

「いえいえ、こちらこそ、無理言ってすいませんでした」

「和やかに会話をするな、お前ら。……琳希、一から全部説明しろ。タクがこっちに來れたのなら、俺は戻れるんじゃないのか」

「そう怒るな、聖夏。クシラからこちらへは一方通行だ。こちらに來ることは可能でも、神ではない限り、クシラに戻ることとはできない。だから、君に、戻れないと言ったのだ。……そして、彼は全部わかった上でこちらに來ている」

「そうなのか？　タク」

「お前がホントはこの世界で生まれるはずだったことも、もう元の世界に帰れないことも全部しってるぜ。その上で、俺はこっちにきてお前の手伝いをしたいと思ったんだ」

俺はいい親友を持ったなあ……じゃなくて!!

「お前もっ、2度とあっちの世界に帰れないんだぞ！
向こっの友達はどうする気だ!!」

「お前より、大切な友達なんていねーよ」

うわっ、恥ずかしいことを真顔で言うな！

こいつ、たまに素で恥ずかしいこと言うんだよなあ。ため息がでる。

「ハア、もう、いい。お前がそこまでわかって来てるのなら何も言わねーよ。」

お前に家族のことなんて言っても仕方ないだろうしな」

「よくわかってるじゃないか」

こいつの家族はかなり複雑な事情で、両親ともにいなく、母方の祖母がタクの面倒を見ているが、ばあさんはタクのことを忌み嫌っていても仲がいいとは言えない。

ばあさんはほとんど責任放棄で、しかも金持ちなもんだから、タクの生活費をかなりの高額与えてタクをマンションで一人暮らしさせてる。

それで面倒見た気になってるらしい。

まあ、そんなわけでタクもばあさんが大分嫌いらしい。

だから、家族の事はタク的にはどうでもいいことなんだろう。

「んで？ タクはいつこっちに来てたんだ？」

「えーと、3日くらい前からかなあ」

「そうなのか。……ん？ そういえばお前、気分は大丈夫なのか？」
俺が言っているのは魔力酔いのことだ。

タクはクシラの人間のはずだから魔力は無い。だから、オウラの様に魔力にあてられてないのか心配になった。

「ああ。大丈夫だぞ。お前の言ってるのって魔力酔いのことだろ？」

そのことなら心配いらないぞ。俺もそれなりの魔力をもってるからな」

「は？　どういうことだ？」

「琳希さんに頼んで、魔力をもらったんだ」

そんなことができるのか！？

んじゃ、オウラにそれすりゃあ俺がここに来る必要なかったじゃねーか。

琳希を思いっきり睨む。

「そんなに睨まないでくれ。君の言いたいことぐらいわかる。オウラにもそうすればよかったではないか、とでも思っているのだろう？　だが、元々ないものを無理やり魂に入れるのだ。魂にかかる負担はかなりのものだ。元から弱っているオウラの魂はそんなことに耐えられない。それに、魔力を与えると魂にかけられる負担によって失神しそうなほどの激痛にさいなまれる。」

拓夢はそれでもいいと言ったから魔力を与えたのだ。しかも、拓夢は君、聖夏の足手まといになりたくないから、多くの魔力を与えて欲しいと言ってきた。よく、死ななかったものだ、と感心するくらいの激痛があったはずだ」

「お前っ……」

言葉が出なかった。感動しすぎて。

7・感動（後書き）

続きが思いつかないっ……。

感想いただけると嬉しいです。
批判、指摘大歓迎。

8 ・ 下調べ（前書き）

遅くなりました……。

8・下調べ

んで、まあ、タクを見つけてから3日がたった。ちなみに、今のタクの立場は俺の従者だ。結構簡単に手続きできた。よかった、うん。

従者ができた今の俺は移動時に兵士に囲まれることもなく、フリーダム。城の中を自由に行き来可能になったから、タクを連れて歩きまわった。しかも、侍従の格好で。

身体系の魔法『カラー』を使って髪と眼の色を黒に変えて、タクに服を借りて。

タクの服は侍従の服だ。普通の白シャツにベストを上羽織る、シンプルな格好。侍従達はタイや、リボンを着けて、自分の職場や階級を表す。タクは、俺の従者になったから、本来のリボンの色は王族の眼の色になぞらえて光沢のある青だが、今は侍従の色の赤だ。ちなみに、俺のリボンも赤。

こっちの方が目立たないから、こうしている。

結構、みんな髪と眼の色を変えただけの俺のことに気づかない。元々病弱で、しかも皇族の恥さらし、『魔力無し』のオウラはほとんど表舞台にでてきてないのも理由の一つだろう。

にしても、侍従の格好で歩きまわるのはなかなか、面白い。

新しく入った同僚だと思った使用人仲間たちが、貴族の色々な話を聞かせてくれる。これがなかなか良くて、結構アホな、誰誰があるお嬢様に告白して振られた、という話から、そんな重要な話何で知ってるんだ、って言いたくなるような政治の話まで、何でもアリだ。

まあ、この噂話が俺が侍従の振りをする最たる理由だが。

知つての通り、俺はこの世界に来てすぐに殺された。その理由が知りたい。

正直、あの時の事は死んだ時のショックか、見事に記憶がとんでいる。だから、俺が憶えていることは、学校の帰りに気が付いたら首を切られて死んでいた、というわけのわからないものだ。

やっぱり、自分の殺された理由ぐらい知っておきたい。本当はすぐにも動き出したいところだったが、体調がなかなか戻らず、兵士たちが何人も付いてきたので、できなかったのだ。しかし、タクが従者になったので、やっと行動に移すことができた。タクもこのことについて、快く了承してくれた。

というわけで、侍従達の噂話から、その理由を探そうと思ったわけだが、これが結構うまくいった。結構前の事だからわからないかと思つたが、かなり使用人たちの印象に残る出来事だつたらしい。すぐにわかつた。

なんでも、俺はいきなりこの城に現れたらしい。そして、俺が現れたのは地上から3メートルほど上だつた。そして、俺の真下には、父親の地位がまあまあ高く、それを笠に着て普段から色々やんちゃをしていたお坊ちゃん。「わ、私の上いきなり落ちてくるとはどういうことか！」と言つて俺の首を持っていた剣でバツサリいっつちやつたらしい。

それで、息子に甘い父親の権力が働き、表向きにはその坊ちゃんの命を狙つた不屈き者を坊ちゃんが返り討ちにした、ということにしたらしい。さすがに、その親ばかりでも、「いきなり上に落ちてきたから息子がバツサリ斬つちやいました」とは言いにくかつたらしい。まあ、普通、誰か、くらい確認するよなあ。

だから、そのオヤジは俺を息子の命を狙つた犯罪者とすることにした。そうすることで、その息子のアホな行為を、暗殺者を返り討ちにした、という格好いいものにしたかつたらしい。それで、俺の首は公衆の面前に、犯罪者としてさらされた、と。

アホオヤジの計画はほぼ、成功していたが、それはそれ、この城で起きたことである。ばつちり、数人の使用人はその時、それを見ていた。そして、その使用人たちがこの話を他の使用人に話してすぐ、その噂は広まったから、使用人たちは真実を知っていた。それで、その話を俺は聞いた、ということ。

「よし。復讐にいつてきます」

今は俺の部屋にいる。そして、さっき聞いてきた話を整理した後、俺が言ったのが「復讐にいつてきます」。

「え？どうやって復讐する気なんだ？」

復讐に対しては何もツツコまないタク。それもどうなんだろう……。

「微妙な顔しないでくれ、聖夏。俺がなんで復讐に対して何も言わないか気になるんだろうけど、俺はただたんに復讐を俺が止めた後のお前が怖いだけ」

どういう意味だ、おい。

「だって、お前ひたすら俺の横で相手に対する文句を呪詛みたいにぶつぶつ言っただもん。めっさ怖えーんだよ。それで結局、止めるのやめちゃうんだよ。しかも、すぐにやらなかった分、ストレス溜まるのか、復讐法方がえくなる」

そうだった。いつの話だろ。全然わからん。

「聖夏、中学の時、同じクラスの女子に髪切られたろ」

ああ、そんなこともあったっけ。

それは確か、俺の姉の秋葉が俺の髪を顔がさらされるように、ピンで留めて登校させた後のことだ。

そのとき、俺の顔はカッコいいと学校中に広まった。けど、正直、自分の顔がカッコいいとかよくわからん。タクいわく「なみのアイドルよりカッコいい」らしい。

毎日鏡で見る顔だし、昔っからこの顔だ。カッコいいとかいわれ
ても……。

まあ、そのカッコいい顔を隠したらダメだとか、わけのわからん
ことを言ってきて俺の前髪を切ろうと数人の女子が俺に特攻仕掛け
てきた。お前ら、ただ、俺の顔を見たいだけだろ、と思つて無視し
ようとしたら、切れた一人の女子が俺の前髪をバツサリいきやつ
た。

普段温厚な俺でも切れますよ。その場でその女子どうやってに復
讐しようと考えていたら、肩をタクに叩かれて止められた。その時
は昼休みで次の授業があつたからしょうがなく引き下がつたが、そ
の後ひたすら、その女子に対する呪詛をはいていた気がする。あれ
がこわかつたのか。そういえば、その後タクに「気が済むまでやつ
てこい」って言われた。あの時は復讐できるのに喜んで特に考えて
なかつたけどそういうことだったのか。俺が怖かつたと。

結局、その女子は丸刈りにしてやつたが、それも怖かつたと。ふ
ーん。

ま、いいや。復讐させてくれるなら。
さて、どうやって復讐しようかな

9 ・タクの特技（前書き）

短
っ
！
！

9・タクの特技

俺の首をスッパリ斬りやがったお坊っちゃんのことがかつて十数日たったころ。俺はまたしても使用人の格好をして、城をうろついていた。ある書類を読みながら。

「何見てんの？　　というか、よく読みながらスイスイ歩けるなあ。俺だったら確実に途中でつまずいてこける！」

「ふーん。んで、これか？」

「あれ？　スルー？」

うん。スルー。

「これはちよつと前にあのシューベルトか、ドーベルマンか、言う名前の坊っちゃんのことを調べるために一寸、拝借した奴のことに
関する書類。あの坊っちゃんの家、なかなか面白いぞ」

「聖夏ー、シューベルマン家な」

「ああ、そんな名前だっけか。どうでもいいだろ？」

何かタクの落ち込むようなため息が聞こえたけど気にしない。
どうせ、すぐもちなおす。

「タクも読むか？」

「ああ。読む」

俺は今まで読んでいた書類をタクに渡してやろうと……………うん？　あれ？

「タクってこっちの文字読めるのか？」

「読めるぞー。勉強したからな」

いや、勉強って……。こっちの世界に来て半年も経ってないの

に文字をマスターしたのか、この阿呆は。

「おい、聖夏。今すごく失礼なこと考えただろう」

くっ、こいつはエスパーか？

「俺の特技忘れたか？」

………はい？………あゝ、忘れてた。

まあ、口に出して言ったら呆れられるから心の中でしか言わないけどな！

タクの特技。それは抜群の記憶力だ。ただ漫画や小説のような完全記憶能力、って言えるほどのものじゃない。例えば、凄く混雑した道で次々すれ違った人の顔を全部完璧に覚えるなんてことは流石にできないし、今日喋ったことを一字一句間違えずに始めから全部言え、なんてこともできない。ただ、意識して、少しでも興味に思ったことは全て覚えることができるそう。タクはこの特技のおかげで学校の成績は常にトップだった。まあ、タクは登場人物の気持ちを読み取るような国語の問題が大の苦手だけだな。

ち・な・み・に、俺は常に校内順位トップ10に入る成績だったと言っておこう。じ、自慢じゃねーぞ！！

………ま、まあ、それは置いておいて、記憶力のいいタクは、その記憶力で文字を覚えただろう。

文字を読むのに支障がなさそうなので改めて、書類を渡す。

「ほら。こけるなよ」

「あれ？俺のために一旦止まるっていう選択はなしなんだ」

当たり前だ。だいたいこんなところで止まったら邪魔以外の何者でもない。現在、城の少し狭い使用人ばかりが使う通路にいる。大量の洗濯物をのせたまあまあのてかさのカー트가通ることもあるここで立ち止まると端によってもかなりの邪魔だ。

「それに、タクがそんな簡単にこけるわけないだろう」

こいつは何でもできる万能タイプの人間だ。

今現在も書類を読みながら俺と喋っている。しかも歩きながら俺は呆れてため息をついた。

「お前の方がよっぽど器用だろうが……」
「そうかー？」

自覚がないのに腹が立つのだが。
殴っていいのか？ いいよな、それくらい。あー、殴りたい。こんな万能人間何で存在するんだ？

「……………聖夏」

俺が悶々と考えこんでいると書類を読み終わったタクが声をかけてきた。

「……………つて、読み終わるの早くないか！？」

俺が書類渡してから20分もたってねーぞ。

「速読はマスター済みだぜ！」

「いい笑顔で断言するなよ…………」。速読にしても早過ぎるだろうが。軽く人外だろ。」

「失礼な。……って、速読はどうでもいいんだよ、聖夏。そんなことよりこの書類の内容、色々な意味でかなり不味くないか？」
「不味いだろうな」

9 ・タクの特技（後書き）

お久しぶりの更新です。
申し訳ありません……。

10・結果？（前書き）

お待たせしました！……、あれ？待ってた方いるのかな（汗）
と、とりあえず、続きドゾ！。

10・結果？

その書類の内容は貴族の国庫横領について、だ。

シューベルマン家を調べていたら、芋づる式に出てきた事実で、完全なる副産物なんだが。いやはや、調べていたらシューベルマン家がかなりの金額の横領をしていたのが、わかったからどうせだし、他にやっている奴はいるかなーと調べたら、でるわでるわ、大物貴族の名前が大量に。

え、政治腐ってません？って言いたくなるくらいですよ、そりゃあ、もう。

「んで、どうするんだ？」

「何が？」

「いやいや、聖夏は一応この国の皇子でしょうが。どうにかしなくてもいいの？」

「別に、どうもしないぞ。だいたい、俺なんかにわか皇子だし。いざとなったら、どこでも暮らせる自信あるし」

いやー、ここまで調べておいてアレだが、うん。……心底どうでもいい。

もともと異世界から来た俺からしたら、どうでもいいことなんだよなあ。琳希には、皇位継げ、とか言われているけど、正直面倒です！！家帰ってもいいデスか？

「いや、君、帰れないし。しかも、一番大事な、こちらに呼んだ理由でもある皇位継承が面倒だと、いわれると大変こまるのだが」

いつの間に……とは、言わない。最近しょっちゅうこんなのだ

し。

「琳希。人の心を読むなよな」

「いやいや、さすがに君を呼んだ理由を全否定したら黙っているわけにもいかないだろう」

「そう言われてもなあ……」

いきなり、ここの皇子してね、って言われて、わかった！立派にこの国の皇子を務めあげるよ！！って言う方が問題あるんじゃないか？

普通俺の反応が正常だと思うが。すべての思いを込めて琳希をジト目でみやる。

「くっ……！！ そんな目で見るな！ ああ、確かに君の考えが正しいだろうが！」

うわあ、ジト目で見たらキレたよ、この神様。それぐらいでキレるなよ。

「こっちだって色々事情があるのだよ！ ちゃんと皇子らしくしてくれ！」

「えー、でもなあ……」

めんどい。俺、自分の首飛ばしやがった馬鹿に復讐したいだけだし。貴族の不正発覚は完全におまけだし。やる気出ません。

「あーもう！ じゃあ、君がやる気になるようにしてやろうじゃあないか！ 君に黙っていたことを全部教えてやろうじゃあないか！」

おお、やけっぱち。というか、おい。

「黙っていたことってなんだ……？」

洗いざらい話してもらおうか？

「聖夏、顔怖いぞ……？」

あー、聞こえない、聞こえない。

お詫び（小説の次話ではありません）

最近更新ができず誠に申し訳ありません。

あと、この小説は設定を練り直し、話の中に出てきた矛盾を消化し、きれいに直したものを、改訂版として、upさせていただきます。栖霞が、見事なまでに、見切り発車した作品であったため、書き進めていく内に大量の矛盾が発生し、続きが書けなくなりました……。

一重に栖霞の力不足によるものです。大変申し訳ございません。
この文章を書いている今、改訂版はほぼ書けていますので、順次、upしてまいります。

作者ページからタイトル『セカイノハテ（改）』にお願いします。

ただ、来年度から、受験生となるため、更新速度が劇的に遅くなることが見込まれます。

できるだけ、upしていくつもりですので、どうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418m/>

セカイノハテ

2011年3月17日22時05分発行